

〔62〕 フィリップ・ドゥクフレ 『IRIS』

～光と影による視覚の遊び～

2003年10月18日 東京新聞 多刊

この秋、フランスのコンテンポラリー・ダンスの精鋭が日本を訪れ、各地で公演やワークショップ、フォーラムを行う。フランス・ダンス03という大々的な企画である。

作品数にして十二。そのすべてを見るのは大変だが、自信をもってお薦めできるのはモントルボ／エルヴェの『パラディ（楽園）』（12月19日、青山劇場）。一九九八年にパリで見て、映像の扱いの上手さ、ダンスの面白さに舌を巻いた。

このところレバートリーが充実してきた新国立劇場が珍しく海外から招聘する『ヘリコプター』と『春の祭典』（11月7～9日）も、深遠で才気に富んだプレルジョカージュの振付だから、新しい世界観を与えられること間違いないだ。

フィリップ・ドゥクフレ演出の『IRIS（イリス）』もこの企画の一環だが、他と違うのは世界初演であること、そしてフランス、中国、韓国、日本のさまざまなジャンルのダン

[62] フィリップ・ドゥクフレ 『IRIS』

～光と影による視覚の遊び～

2003年10月18日 東京新聞 多刊

サーを集めて、二年という時間をかけて完成されたことだ。フランスのダンスとはいえ、開催地日本の要素を多分に取り込んだ国際交流の作品である。

ドゥクフレといえば、一九九二年のアルベルヴィル冬季オリンピックの開会式、閉会式の演出で有名だが、『IRIS』の舞台では上手に民家、下手に電柱が立っている。たるんだ電線がアルベルヴィルのリフトを思わせないでもないが、それにしても懐かしい日本の風景だ。

イリスとはギリシャ神話の虹の女神の名、また普通名詞では眼の「虹彩」を意味するが、花の菖蒲もフランスではイリスと呼ばれる。タイトルが示唆しているように、この舞台作品の主演は映像である。あるいは光と影による視覚の遊びと言ってもいい。

舞台上で動くダンサーの等身大の映像がスクリーンの水平、垂直の軸に対して対照的に映し出され、その鮮やかな四つの像がふしぎな

〔62〕 フィリップ・ドゥクフレ 『IRIS』

～光と影による視覚の遊び～

2003年10月18日 東京新聞 多刊

模様を描き出す。人間の身体が万華鏡の一つの単位になるという奇妙な感覚もさることながら、目に映る図形そのものの美しさに、思わず見惚れてしまった。

フランス奇術や中国演劇の妙技、身振りのコントと、異質の文化の花々を集め、それらをテクノロジーによって眼の錯覚の幻想的なイメージに展開しつつも、ドゥクフレの世界はいつもとても穏和で親しみやすい。しかし、多言語の乱れ飛ぶ不可解な会話から始まって、シャンソンの『暗い日曜日』で幕を開じた彼の心中にあるものは、必ずしも幸福感だけではないのかもしれない。

(2日、神奈川県民ホール)